日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 2 号 / Boletín Núm. 2

2001 年 6 月 30 日 / 30 de junio de 2001

事務局
〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9
日本学会事務センター
Tel: 03-5814-5801 Fax: 03-5814-5820

編集局
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6
京都外国語大学イスパニア語学科(坂東研究室)
Tel: 075-322-6121 Fax: 075-322-6246

ホームページ: http://www.nanzan-u.ac.jp/HISPANIA/

創設当時の思い出（上）

原 誠（拓殖大学）

初めにお断りしておく。我々の学会の第 1 回大会は 1955 年 12 月 4 日（日）、東京外国語大学（もちろん府中へ移転前の西ヶ原キャンパスにおいて）で行われた。その時の学会名は「日本イスパニヤ語学会」というものであった。その後 1976 年になって、「語」の字を取り去ることが理事会および総会で承認されたが、この改名は語学・文学の研究者のほかに、スペイン語圏の文化の研究者をも会員として迎えようという意図のもとに行われたものであった。その時サラリーマン必要経費訴訟でも有名であった大島正氏は、スペイン語学を専攻している筆者が「日本イスパニア語学会」の「語」を取ることに大反対するのではないかと思われたのであろう、日本独特の根回しを愛知県立大での大会の際に筆者になさった。しかしその頃は筆者も文化の研究者を学会に迎えることは時代の趨勢であり、従って「語」を取ることには全く反対しなかった。しかし学会の名づけ親である永田寛定氏がご存命であったらどうだったであろうか。永田氏が活躍しておられた頃の日本では「文化」は独立した学問分野として確立していたとは言えない状況であっただけに。

筆者はそれよりも「イスパニヤ」という名称の方により深い関心がある。断っておくが、「イスパニア」ではない。これまた名づけ親である永田氏の個人的趣味によるものである。つまり「ニ」から「ア」に渡る時に生じるわたり音「ｊ」（ヤ行音）を尊重しようというもので、筆者もこれには賛意を表する。従って筆者は「バレンシヤ」とか「フワン」とか表記する癖がある。それはそれでいいのであるが、「イスパニヤ」、あるいはラテン語を厳密に日本語の片仮名に転写すると「ヒスパニヤ」かもしれないが、筆者の考えではこの「イスパニヤ」とか「ヒスパニヤ」と言った場合はルシタニヤがその中に入ってしまい、ポルトガル語学・文学・文化の研究者に対して失礼ではないかと思うのだが、さりとてそれに代わるより適当な名称があるかと言うと、それがないのであるから致し方ない。しかもこの「イスパニヤ」は、別の意味でも他の代替名が見つからないという大変な

メリットを有しているのである。つまりこの名称はスペインのみならず、中南米のスペイン語圏を含んでしまうのである。さらに望ましくは、hispánico という形容詞のもとの名詞があればそれが最適だと思うのだが、それは我々の学会の雑誌「イスパニカ」の hispánica か、はたまた hispanismo であろうか。いずれにしてもこれらを片仮名表記して日本人の間にポピュラーにするのは至難の業であろう。結局「イスパニヤ」に勝る固有名詞はないということになった。

次はよく「スペイン語」のことを「イスパニヤ語」という人がいるという問題について。筆者には「イスパニヤ語」という呼称を聞くと、明治時代に生きていたわけでもないのに、何だか明治時代に戻ったような気がする。しかし明治生まれの永田氏は頑強に「イスパニヤ語」を用いることを主張された。同氏を崇拝しておられた高橋正武氏も同様である。高橋氏の名著『スペイン広文典』（白水社 1951 年）はご本人は「イスパニヤ」としたかったのであろうが、出版社側の強い要請によって「スペイン」となったものであろう。他方大阪外国語大学にはホセ・ルイス・アルバレス氏が居られ、この方は徹底した英語嫌いで、「スペイン」は英語だから使ってはいけないという主張の持ち主であった。関西の日本人のスペイン語教師はほとんど全てアルバレス氏の教え子であり、同氏には頭が上がらないから、関西のスペイン語を専攻できる大学はすべて「イスパニヤ語学科」または「イスパニア語学科」と称さざるをえなかった。筆者も天理大学での学会で折良くならぬ折悪しく、「イスパニカ」が配布され、そこに「中南米のスペイン語」と題する論文を発表していたから、さあ大変、アルバレス氏にこっぴどく叱られてしまった。だいたい同氏はカスティーリャ語以外、中南米のスペイン語などスペイン語と認めない人なのだから始末が悪い。関東でも上智大学は「イスパニア語学科」と称している。その中にあって堂々と「スペイン語学科」と称していたのは東京外国語大学であった。これは会田由（あいだ　ゆう）氏の「スペイン語」は英語ではない、日本語である」という信念に基づくものであった。けだし卓見である。ある時東京外国語大学庶務課を通じて文部省から、「東京外国語大学はなぜスペイン語学科と名乗り、大阪外国語大学はなぜイスパニア語学科と称しているのか」という問い合わせを筆者は受けたことがある。これに対しては筆者は迷わず、会田氏の信念とアルバレス氏の執念とに触れてその違いを説明しておいた。現今では、よく分からない「大学改革」とやらによって、語学科が解体されてしまったので、「スペイン語」か、「イスパニア語」かの問題はどうでもよくなってしまった。なお一つ付け加えておくが、アルバレス氏をこの上なく尊敬しておられる神戸市外国語大学の福島教隆氏は今でも、差し支えない限り、「イスパニア語」という名称を用いておられる。この種の孤軍奮闘には敬意を表すべきであると思う。ちなみにさすがのアルバレス氏も、東京六本木の在日「スペイン国大使館」までは改名を強要することには成功しなかったようである。

以上が、大変長くなったが、前置きである。以下創立当時の日本イスパニヤ学会について筆者の思い出を語っていくことにする。ただし、上述の通り、当時は「日本イスパニヤ語学会」と称していたことをお断りしておく。

筆者は浅はかにも、日本イスパニヤ学会が成立したのは、旧専門学校が新制大学に昇格した結果、専門学校時代は教員は単なる教員でよかったのに、大学ともなると、教師兼研究者でなければならないということで、それに伴ない学会出張費がもらえることになり、それで学会を創ろうということになったのかと思っていた。たしかにそれも学会成立の一つの要因であったに違いなかろうが、これで

は動機がいささか不純過ぎる。筆者の不明を恥じねばならない。筆者の手元にある、1956年5月1日付けの「学会ニュース」第1号によると、わが国におけるイスパニヤ語の研究は数十年の歴史を経てはいるものの、統一され公に認められた学会もない状態であったが、各方面に実現を待望する声が上がり、機がいよいよ熟したものと思われたので、水谷清氏の呼び掛けに応じて発起人会が組織されたと書かれている。そこで1955年7月24日に準備会が開かれ、

- 水谷清氏提出の会則原案を検討の上で承認
- この原案を関西方面に回送し意見を求める

以上2件が決定された。

次いで同年9月25日東京有楽町「フジアイス」 ——この店は今はその跡形もない—— にて正式発起人会を開催。

- 発起人会としての会則案作成
- 第1回創立大会準備委員の選任

の2件が議決された。

これを受けて大会準備委員はその後数度の会合を持ち、関係者に対する学会加入の勧誘、大会に関する各種印刷物の作成と発送、大会当日の諸準備を行って、いよいよ12月4日の創立大会を迎えることになる。 (つづく)

《学会紹介》

ボルヘス会

会長 野谷 文昭(立教大学)

ホルヘ・ルイス・ボルヘスの生誕百年に当たる1999年、世界各地で記念行事が催されたが、日本でも7月1日から3週間にわたって、立教大学およびストライプ美術館を会場にマリア・コダマ女史を招いてのシンポジウムや講演会等が開かれた。組織したのはボルヘスを愛好する研究者、詩人、作家、版画家、元外交官らからなる実行委員会で、名称をボルヘス会とした。記念祭終了後、関係者から会を存続させたいという声が上がり、8月28日、有志が集り運営委員会を開催するとともに、起草された会則を承認し、ここに新たな組織としてのボルヘス会が誕生した。

本会の特徴は研究者ばかりでなく広くボルヘス愛好者に開かれていることである。この姿勢は、文学を愛する人間なら誰でも受け入れるというボルヘスの精神に基づくとともに、ボルヘスとその作品をより深く理解するためには、様々な視点、アプローチが必要であるとの考えによっている。ボルヘス会が、個人の成果を交換し合い共有するとともに、ボルヘスの世界を享受する場として位置付けられていることは言うまでもない。2001年6月現在、会員数は約50名であるが、スペイン語文学者、英米文学者、仏文学者など、大学院生を含むアカデミックな研究者に混じって、詩人、作家、編集者、医師、建築家らが名を連ねている。大部分は東京周辺在住者であるが、関西、北陸地区にも会員がいる。

本会の主な活動のひとつに年1回の大会開催がある。本来はボルヘスの命日6月14日に合せて開かれることになっているのだが、運営上の都合で第1回は昨年

9月30日に立教大学で開催され、作家の川上弘美氏による記念講演「ボルヘスと私」や詩人の高橋睦郎氏による邦訳詩朗読、タンゴ歌手の香坂優氏による歌などがプログラムを賑わした。今年の第2回大会は、9月22日（土）に立教大学で開催することになり、作家の多和田葉子氏の記念講演、研究発表、シンポジウムなどが予定されている。また大会のほかに今年の3月9日に研究会を開き、会員の内田兆史氏「≪アル・ムターシムを求めて」考――historia から ficción へ」および真下祐一氏「マセドニオ・フェルナンデスとボルヘス」の二つの研究発表が行われた。さらに6月9日には命日を記念する＜迷宮忌＞として、立教大学を会場に立教女学院短期大学教授で旧約学が専門の秋吉輝雄氏による講演「ボルヘス『七つの夜』の「カバラ」を読む」が行われた。

もうひとつの重要な活動に会報の発行がある。昨年、大会に合せて0号を出したのに続き、本年は論文を中心とする第1号の刊行が予定されている。

なお、ボルヘス会事務局は現在立教大学に置かれ、連絡先は以下のとおり。

〒171-8501　豊島区西池袋　3-34-1
立教大学法学部　野谷研究室
Tel/fax　03-3985-2611
E-mail　borgiana1899@hotmail.com

《国際会議報告》

カルデロン2000国際会議

吉田 彩子（清泉女子大学）

毎年のように海外の学会に参加するようになって10年近くなる。去年は9月18日から23日までパンプローナにあるナバラ大学の国際会議にでかけた。ピレネーの風がポプラ並木を日ごと鮮やかな黄に染めてゆく季節だった。20世紀最後の年は、カルデロンの生誕400年にあたり、「カルデロン2000」と題する一連のシンポジウムや記念行事がスペイン各地のみならず、イタリア、メキシコ、インドでも開催された。当会議はその一環であり、唯一の研究発表の場だった。

開会式の様子はTVEのニュースでも放映され、新聞の紙面にも大きく扱われたが、一方で夏に猛威をふるったETAのテロの影響は深刻だった。参加者のキャンセルが続出し、プログラムは大幅な変更を余儀なくされた。主催者側は毎朝、掲示板に新しいプログラムを張り出さなければならなかった。消滅したパネルもあった。また、期間中に学会としては異例の厳戒態勢がしかれたことも残念である。会議後に確認した参加者数は225名、うち発表を行ったもの198名。参加国は、スペインを除くと4大陸・19カ国。カナダ、合衆国、メキシコ、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、英国、ポルトガル、イタリア、フランス、ドイツ、オランダ、ルーマニア、ポーランド、ロシア、インド、中国、台湾、日本からは南山大学の佐竹謙一氏と私が発表を行った。講演数は6本。コンプルテンセ大学のディエス・ボルケ氏をはじめとするカルデロン研究の第一人者たちが壇上に立った。観劇、コンサート、遠足、夕食会などの文化・交流行事も盛り沢山だった。

私がこの会議に参加を申し込んだのは、第4回国際黄金世紀学会が開かれた99

年夏のミュンスターでのことだ。会長のイグナシオ・アレリャノ氏や、96年秋に清泉女子大学で公開講座を行ったトゥルーズ大学のマルク・ヴィッツ氏らが運営委員に名を連ねているのだから嫌とはいえない。また、個人的にはゴンゴラの研究が『孤独』の翻訳・評釈の出版で一段落したこともあり、教室では『ドン・キホーテ』の講読も始めていた。幅広く、黄金世紀の文学を読み込んでいきたいと思っていた時期なので、カルデロンの会議は研究の励みにもなると考えた。私の発表は『わが国におけるカルデロンの受容』と題して、鴎外訳の『サラメアの村長』が、なぜ明治の日本人に不評だったのかを考察するものだった。私はこれを日本人とスペイン人の＜honra＞に対する考え方の相違として解決をはかった。パネルではボルドー大学のカルデヤック氏が日本人の＜honra＞について説明を求めたのをきっかけに議論があり、NY市立大学のソレダ・カラスコ氏が作品そのものの難解さを指摘してまとめた。別のセミナー参加のために当地に滞在中だった京都外国語大学の三木一郎氏が聴きにきてくださったのは有り難かった。

また、今回は初めてパネルの司会という大役も命じられた。コンプルテンセ大学やラ・マンチャ大学の先生方の発表をさばき、教室の討論を仕切るのは痛快無比だった。時間が重なったために聴けなかったが、佐竹氏がカルデロン劇の闇の効果を論じたパネルは大盛況だったと聞いている。

最後に付け加えておきたいのは委員長のアレリャノ氏のことである。小柄だがタフで、その勤勉な仕事ぶりは驚異的だ。そして、いつも周囲への気配りを忘れない。学会の誰からも信頼される所以である。彼が閉会式で行った挨拶は、おそらく宇宙一すばらしい。なぜなら、それは宇宙一短いからだ。

「主役はみなさんです。ありがとう。」

CONVOCATORIA DE ARTICULOS

Este boletín solicita colaboraciones relativas al mundo hispano:

- Anuncios e informes sobre los congresos que se han celebrado o se celebrarán tanto en Japón como en el extranjero
- Anuncios e informes sobre las conferencias académicas u otros eventos que se han celebrado o se celebrarán en Japón
- Presentación de libros nuevos (en japonés o en español) sobre el mundo hispano
- Otros temas

Estas colaboraciones han de ser escritas en japonés o español. La extensión máxima de cada colaboración no ha de superar los 2,800 caracteres.

2001年度第1回理事会

日時：5月13日（日）13：00～15：45
場所：モンブランホテル（名古屋駅前）

1. 前回議事録（2000・10・28）を承認
2. 報告事項
   (1) 退会4件と再加入1件があった。（小林）
3. 審議事項
   (1) 加入申請12件を承認。
   (2) 庶務委員、会計委員、広報委員を選出。
   (3) 2000年度会計決算報告を承認。
   (4) 2001年度第47回大会の開催要項を審議。
   (5) 2001年度第47回大会での研究発表応募要項を決定。
   (6) 『HISPÁNICA』と会報について
      ①双方の原稿募集要項を決定。
      ②『HISPÁNICA』の投稿規定（第44号、pp. 140-141）の西語版を作成する。
   (7) 2001年度理事半数改選のための選挙管理委員会を設置。
   (8) 理事の人数について審議し、次の結論に達した：
      ①現行20名（東日本10、西日本10）を16名（東日本8、西日本8）とする。
      ②理事の任期を終えた会員の理事選挙における被選挙権停止期間を現行の2年(会則「理事の数および第9条第4項についての申し合わせ」の3)から4年に改める。
      ③上記の改訂事項は2001年度の総会に諮り、承認された場合は2001年度の理事半数改選より適用する。その結果、移行期間となる2002～3年度は理事の数は18名（東日本9、西日本9）となる。
   (9) 理事長の任期は現行の年度末ではなく、新理事長選出までとする。
   (10) 2002年度第48回大会の会場校候補について。

新刊紹介（自著を語る）

佐竹謙一著『スペイン黄金世紀の大衆演劇—ロペ・デ・ベーガ、ティルソ・デ・モリーナ、カルデロン』（三省堂、2001 年）の出版をめぐって

佐竹 謙一（南山大学）

明治 22 年に森鴎外が弟とともに、カルデロンの『サラメアの村長』を『調高牟洋紘一曲』と題してドイツ語訳から邦訳したのを皮切りに、これまでにスペイン黄金世紀の演劇が十数篇スペイン語から日本語に翻訳されてきた。セルバンテスの幕間劇数篇、ロペ・デ・ベーガの『上なき判官これ天使』や『フエンテ・オベフーナ』、ティルソ・デ・モリーナの『セビーリャの色事師』、ルイス・デ・アラルコンの『疑わしい真実』、カルデロンの『十字架への献身』、『人世は夢』（戯曲）、『サラメアの村長』、『人世は夢』（聖体劇）、『世界大劇場』（聖体劇）、『驚異の魔術師』、『淑女「ドゥエンデ」』などである。おそらくこれらの訳本を読まれた読者はその時代にあって思い思いの解釈を楽しんだに違いない。しかしながらよく考えてみると、劇作品や解説を読んだだけでは当時の芝居状況はもちろんのこと、各劇作家の意図やその時代独特の劇作法が見えてこないことに気づく。

では、スペイン黄金世紀の芝居をその当時のままの姿で味わうには、少なくとも何が必要なのかということになる。むろん列挙すればきりがないが、目下日本語で読めるものとしてはロペの『当世コメディア新作法』を繙くのが一番の近道であると思われる。1978 年に『世界演劇論事典』（評論社）が出版され、その中にロペの『新しい劇芸術』（『当世コメディア新作法』）とティルソの『トレードの庭で』の抄訳があわせて 4 ページほど収録されたが、果たして当時これらの演劇理論の重要性に気づいた人は何人いただろうか。いずれにしろ、この劇芸術論には当時の人気作家ロペの芝居づくりにかける思いが、観客に対する配慮や伝統的な様式を重んじる学識者への配慮とともに綴られており、作劇方法を知る上では貴重な資料の一つとなっている。

だが、これだけではまだまだ芝居の全体像が見えてこない。そこで意を決して稿を起こしたのが、今回出版の運びとなった上記の書物である。内容の構成としては、序章をふくむ 7 章から成る。ロペ以前の演劇にはじまり、当時の新しいタイプの演劇、ロペの人気を前に芝居づくりを諦めざるをえなかったセルバンテスの苦悩、マドリードの劇場構造、観客、役者、宮廷演劇、演劇論争、それに 16 世紀末から 17 世紀後半にかけて活躍した主な劇作家たち、すなわちロペ、ティルソ、カルデロンの作品分析などを中心に、当時のスペイン演劇の世界を幅広く解説したものである。

今のところわが国では、スペイン演劇はあまり知られていないが、シェイクスピア劇と比較してもけっして見劣りすることのない傑作も多いことから、今後さらに翻訳が進み、多くの人たちに愛読される日がくることを願ってやまない。

新刊紹介

レイナルド・アレナス著 安藤哲行訳『ハバナへの旅』現代企画室 2001 年 3 月

久野 量一（法政大学）

この作品は、レイナルド・アレナスが 90 年に自殺する直前に刊行した、生前最後のテクストである。三つの中篇が収められているが、登場人物や状況設定は作品ごとに異なり、いわゆる連作小説集ではない。各作品の最後に執筆の時期が明記されていて、最初の作品は 71 年ハバナで、残りの二つは亡命した 80 年以降にアメリカ合衆国で書かれている。

最初の「エバ、怒って」は、周囲の人々に注目されるのを生きがいにしたキューバ人カップルの冒険譚である。どこへ行っても奇抜な服装で人々の視線を集める二人はしかし、自分たちを見ていない人がいるとの疑念にとりつかれるようになる。二人はその疑いを晴らそうと、くまなくキューバ中を旅して回り、ついに島の東端で彼らにまったく眼を向けない人物に出会う…。二作目の「モナ」は、ダ・ヴィンチの絵画「モナ・リザ」をめぐって亡命キューバ人がニューヨークで体験した奇怪な事件を、そのキューバ人の手記の発表という体裁にした実験性の高い作品である。最後の表題作「ハバナへの旅」は、同性愛者であるがゆえにキューバを去りアメリカ合衆国に亡命した男が、15 年ぶりに祖国へ戻り、妻や息子と再会する、一応ハッピーエンドの物語である。

連作でないとはいえ共通する要素はあり、そのひとつとして同性愛的要素が挙げられる。それは、一作目では仄めかされるだけだが、二作目と三作目ではさらに踏み込んで書かれている。時代とともに同性愛に深く関わる作品を書くようになったのは、アレナスがキューバを去ったことと無関係ではないだろう。そしてもうひとつ、この三作を通じて痛切に表現されるのは、キューバ革命へのアレナスの批判的な視線である。特に最後の「ハバナへの旅」で近未来のキューバを描くとき、アレナスの、革命に対するネガティブな眼差しは頂点に達する。彼が想像するハバナは荒廃しきっている。建物は朽ち果て、軍用車が走り回り、みすぼらしい服を着た人しか歩いていない。登場人物の一人は言う。「この国全体が気狂い沙汰だってこと、ここで生きるのは気狂い沙汰だってこと」と。

同性愛と革命批判というこの二つのメッセージは、革命に幻滅してからのアレナスの立場を鮮明に映し出している。文学上の活動以外でも、ドキュメンタリー映画『不適切な振舞い』(Mauvaise conduite、 84)に出演してキューバにおける同性愛者への迫害を告発したり、カストロ政権打倒のため積極的に行動したりした彼にとって、この二つは、いかなるときにも避けて通ることのできないテーマだった。

『めくるめく世界』（国書刊行会）のような、あのユーモアに満ちた奇想天外なストーリーとまではいかないが、この小説集でも、いかにもアレナスらしい想像力が発揮されている。『ハバナへの旅』が、彼の物語作品の中で重要なテクストであることは間違いないだろう。

新刊紹介

ペドロ・シモン著　木下 登監修『ラテンアメリカ文学研究』行路社 2000 年 5 月

片倉 充造（天理大学）

これまでラテンアメリカ文学案内書といえば、ジーン・フランコ『ラテンアメリカ文化と文学』（吉田秀太郎訳、新世界社）、ジャック・ジョゼ『ラテンアメリカ文学史』（高見英一・鼓直訳、白水社）それに蔵原惟人監修『世界短編名作選ラテンアメリカ編』（新日本出版社）などが定番であった。本書も同係累だが、400 頁超の少し大部な文学書である。

ラテンアメリカ文学（史）全体の総論を述べ、しかも主要作家の作品論を細密に論考することは、壮大な構想であるに違いない。しかしながら、アルゼンチン出身で、後年ワシントンの米国カトリック大学大学院にてイスパニア（スペイン・ラテンアメリカ）文学を専攻、そして 30 有余年間日本での大学教育（南山大学ラテンアメリカ文学ゼミ他担当）の現場に携わり、20 編以上もの論文を着実に発表してきた著者ならではの学問的事績の結晶が本書であると聞けば、読者として納得する他はない。

「第Ⅰ部」は文字どおり、ラテンアメリカ文学史であるが、著者が別けても“ラテンアメリカ文学ブーム”に高い関心を寄せているのがわかる。「第四章現代イスパノアメリカ小説（スペイン語で著述された小説）「ブーム」とその体系化の試み」では、「ブーム」の主要因を「語りにおける時間の扱い」、つまり、時間の移行(飛躍・逆転・交錯など)に求めるが、これは福永武彦『二十世紀小説論』での“二十世紀小説の特徴”と重なるものがある。さらに「第五章その他の問題点」での「短編小説ブームと栄光」では、60 年代に発生したラテンアメリカ小説ブーム（＝文学刷新）の予兆は、すでにオラシオ・キロガ（ウルグアイ）やルルフォ（メキシコ）そしてマルケス（コロンビア）他の短編小説にも認められていたとの指摘は、なかなかの慧眼である。

「第Ⅱ部」（主要作家とその作品論）では、アレッホ・カルペンティエル（キューバ）『失われた足跡』の論稿でも、やはり「時間論」が展開されている。

「ガルシア・マルケスと『百年の孤独』」そして「ガルシア・マルケスの小説における〈神父〉あるいは〈司教〉について」がともに面白い。前者での『百年の孤独』はすぐれてラテンアメリカ的でありながらも、現代人の問題と本質的に関係しているとの見解は、同書の価値が、地域主義に埋没しない、同時代的かつ普遍的であることを明示するものである。後者ではマルケス作品のカトリック僧侶を、およそ 3 つの類型“ご都合主義”、“時代遅れ”、“有徳”に区分し、公共や民衆の利益に貢献する実践派の宗教者たちの活動をも呈示するところは、著者のカトリック司祭としての真摯な在り方を反映している。

スペイン文学論を纏めた「第Ⅲ部」では、「セルバンテス、ドン・キホーテ、サンチョ」が出色と言える。「古典とは過去のものである。しかしそれは同時に今日的でもある」、「現代人との対話に耐え、時間を超越して再読されることが世界文学という名に値する」と定義して、『ドン・キホーテ』を賞賛する。これと同

様の名言（「古典を読むのに遅すぎることはない」（カルロス・フエンテス『老いぼれリンゴ』安藤哲行訳集英社文庫）や講演（ルベン・ロメロ「『ドン・キホーテ』をどう読むか」（『全集』）も見受けられるが、加えて著者は『ドン・キホーテ』の成功あるいは本質を、キホーテ/サンチョ主従をはじめとする主要人物たちの深い人間性にあると読解する。

読み進むうちに、まるでスペインか中南米の大学で文学論を受講しているようなどこか知的な気分に浸れたのは、評者だけではないだろう。著者のシモン先生は、教育界にあって若者たち諸個人に、「人間の尊厳の重要性」を説いてきた。このことはそのまま、“ヨーロッパからの文学的影響を認めながらも、イスパノアメリカとしての尊厳を高揚したラテンアメリカ文学ブーム”研究への著者の従事・深化と見事にも呼応していると思う。

【事務局から】

《会員の異動》

新入会員

1. 青砥　清一
   AOTO　Seiichi　（東京大学大学院）
   研究テーマ：「〈移動動詞＋現在分詞〉構文とアスペクト」「メタファーと写像」
   [redacted]

2. VITALE　Analia　（同志社大学）
   研究テーマ：「1. 戦後日本におけるリプロダクティブ・ヘルスをめぐる実証研究：女性運動の議論のうち、経口避妊薬（ピル）をケーススタディとしてリプロダクティブ・ライツとは何かという問題を設定」「2. 比較社会学研究：日本と中南米のリプロダクティブ・ライツの概念史比較とその歴史社会的条件の考察」
   [redacted]

3. 岡本　淳子
   OKAMOTO　Junko　（大阪外国語大学大学院）
   [redacted]

4. 近藤　豊
   KONDO　Yutaka　（天理大学国際文化学部イスパニア学科）
   研究テーマ：「スペイン語の再帰動詞」「ガルシア・ロルカ」
   [redacted]

5. TANI MORATALLA　Rumi　（東京大学教養学部）
   研究テーマ：Al-andalus: Estudios sociológicos del mundo hispanoárabe
   〒153-8902 目黒区駒場 3-8-1, 東京大学 8 号館 4F
   Tel/fax: 03-5454-6440

6. 寺尾　江利子
TERAO　Eriko　（関西外国語大学）
研究テーマ：「ガリシアのアイデンティティの起源（イベリア半島西部における 3～6 世紀の精神風景）」
[redacted]

7. 寺本　あけみ
TERAMOTO　Akemi　（英知大学）
〒661-8530 尼崎市若王子 2-18-1　英知大学
Tel: 06-6491-5083

8. DIEGO MIGUEL　M. C. Susana　（琉球大学法文学部）
〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1　琉球大学
Tel: 098-895-8904　Fax: 098-895-8187

9. 外村　敬子
TONOMURA　Keiko　（日本大学経済学部）
[redacted]

10. 橋本　和美
HASHIMOTO　Kazumi　（京都外国語大学）
研究テーマ：「完了した結果を意味する迂言法（用法とニュアンスの相違）」
[redacted]

11. 真下　祐一
MASHITA　Yuichi　（日本大学経済学部）
研究テーマ：「イスパノアメリカ詩」
[redacted]

12. 眞島　友一
MASHIMA　Tomoichi　（九州栄養福祉大学）
研究テーマ：「食を通じた国際交流のあり方について」
[redacted]

13. 矢坂　協子
YASAKA　Kyoko　（日本大学経済学部）
[redacted]

<u>所属機関の変更</u>

1. 角田　哲康
SUMITA　Tetsuyasu　（日本大学国際関係学部）
[redacted]

2. 仲井 邦佳

NAKAI　Kuniyoshi　（立命館大学産業社会学部）
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1　立命館大学
Tel: 075-466-3148

退会者

URGELL Nuria、細川幸夫、棟方久男

物故者

WATKINS Montse

【原稿募集】

本誌『会報』の原稿を募集しています。下記のような項目など特に分野は問いません。スペイン語圏に関する原稿をどしどしお寄せください。

○国内外の学会の案内と報告
○国内の学術講演会および行事の案内と報告
○スペイン語圏に関する新刊書（和書・洋書）の紹介
○その他
（使用言語：日本語もしくはスペイン語）
（原稿分量：原稿用紙四百字詰 1000～1400 字）

【編集後記】

『会報』第 2 号が刊行の運びとなりましたので、お届け致します。ご一読いただければ幸いです。小林一宏理事長の案で、今号から三回にわたって、原誠先生に「日本イスパニヤ学会」の貴重な歴史を語っていただくことになりました。これで若い世代の会員の方々にも学会史が語り継がれてゆくことでしょう。その他、新しい学会の紹介、国際学会の報告、新刊書の紹介など、多くの先生方から玉稿をお寄せいただきました。この場を借りてお礼を申しあげます。創刊号でも触れましたように、本誌を通じて会員の皆様方にさまざまな情報をお伝えしたいと思っています。多くの情報を事務局までお寄せくださいますよう併せてお願い致します。（坂東）